

県立図書館だより

平成25年10月

青森県立図書館報 第17号

◆ ◆ ◆ 科学おはなし会 ◆ ◆ ◆

児童閲覧室では、毎月第4土曜日（12・3月を除く）14:00～14:30に、身近な科学をテーマに「科学おはなし会」を開催しています。

毎回テーマを変えて実験や本の紹介などを行っていますが、テーマによっては、普段できないような体験をすることができます。平成25年度は、1時間の拡大版として、7月に「運動の話と体操」、8月に青森県総合社会教育センター「インフォメーションプラザありす」と合同で「りんごのお話」を開催しました。

7月「運動の話と体操」

かけっこが速くなるトレーニング方法を教えてもらいました！



8月「りんごのお話」

農家の方からりんごのお話を聞いた後、みんなでりんごの袋かけをしました。



11月9日（土）のおはなし会の後には「りんご狩り」を行います。

第2土曜日には絵本の読み聞かせを行う「おはなし会」を開催しています。親子で県立図書館に来てみませんか。

詳しくは当館ホームページ「こどものへや」をご覧ください。

※こどものへや(<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/kodomo/index.html>)

目 次

科学おはなし会	1
県民のための県立図書館	2
こんなレファレンスがありました	3～4
子どもの本の紹介	5
郷土資料の紹介	6～7
近代文学館資料の紹介	8
カウンターから一言	9

県民のための県立図書館

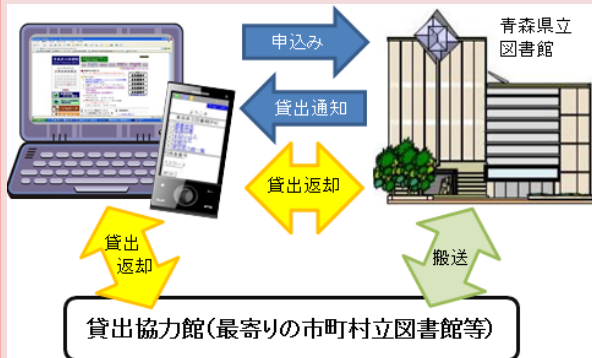
青森県立図書館は、県民の皆様がどこに住んでいても、当館のサービスを受けることができるよう、様々なサービスを皆様の身近に提供しています。

オンライン貸出サービス

県立図書館の本をインターネットで検索し、貸出や予約の申込みができます。

貸出準備ができ次第、メールでお知らせし、最寄りの貸出協力館や県立図書館で本を受け取ることができます。

利用には**事前の申込み**が必要です。



遠隔地返却サービス

県立図書館で借りた資料を、指定した最寄りの協力館に返却できます。

借受けの際に、県立図書館カウンターで返却する市町村立図書館等を指定してください。

青森県図書館情報

ネットワークシステム



県内の図書館等がネットワークで連携されており、最寄りの図書館を通して他の図書館所蔵の本を取り寄せることができます。

県立図書館からの資料搬送は定期的に行われています。

県立図書館ホームページから[横断検索](#)を行うこともできますので、ご自身でネットワーク加入館の所蔵状況を確認することもできます。

障害者等配本サービス (アウトリーチサービス)



重度心身障害等の事由により、直接、県立図書館へ来館することが困難な方々へ、当館の資料を宅配により貸出するサービスです。

送料は県立図書館で負担しております。

利用には**事前の申込み**が必要です。

県民の皆様のご学習活動、調査研究、読書活動を支援する県立図書館は、**地域を支える情報拠点**です。

皆様の身近にある県立図書館の様々なサービスをどうぞご利用・ご活用ください！

レファレンスサービス

- ・探している本が、どこの図書館にあるか知りたい。
- ・こんなテーマの本はありますか。
- ・こういう事柄や人物を調べたいのですが、どんな本がありますか。

上記のような皆様の調べものを、豊富な資料や情報を使って手助けするサービスです。

来館、電話、FAX、メール、郵便で受け付けております。

～ こんなレファレンスがありました ～
故郷 (ふるさと) の話題読み語り 【第17回】



「異国漂流奇譚種々」

今年も間もなく**読書週間**（10月27日から11月9日まで）を迎えます。

第67回となる今年の読書週間は、「**本と旅する 本を旅する**」がテーマとなっています。

見知らぬ土地の人たちや自然を描き出した「旅の本」は、温かな人間同士の触れ合いや喜びにあふれ、また、荒れ狂う大海、乾ききった砂漠、極寒の地を舞台とした探検・冒険記は、ハラハラ、ドキドキ、私たちが夢中にさせてくれます。

青森県人の旅の本では、再来年（2015年）に生誕170年・没後100年となる**笹森儀助の『南島探検』『千島探検』**、旅行記というよりも冒険記と言えそうな柔道家・**前田光世の世界転戦記『世界横行柔道武者修業』**が全国的に知られています。

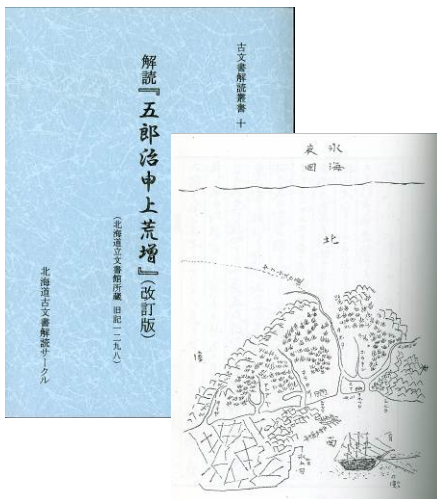
それらは自ら飛び込んでいった冒険・探検の「旅」ですが、本人の意思ではなく、事件や事故によって否応無く、時には生死を賭けた旅を強いられる場合があります。

今回のご質問は、『あっぱれ五郎治』（楠美鉄二著 東奥日報社 1974）を読んだ方からいただきました。

【質問】

江戸時代、中川五郎治のように外国に行った人（現在の青森県域の人）はいますか。資料はありませんか。

『あっぱれ五郎治』の主人公「中川五郎治」は、盛岡藩領川内村（現在のむつ市川内）生まれ。文化4（1807）年、漁場の番人小頭をしていた択捉島でロシア兵に拉致されます。二度にわたる逃亡は失敗してしまいますが、オホーツクで医師の助手として、後に本邦初となる「種痘法」を学ぶこととなります。



『解説 五郎治申上荒増』(改訂版)
北海道古文書解説サークル 平成22年

文化9（1812）年、日本に幽閉されていたジアーナ号艦長ゴローニンとの捕虜交換の為に国後島へ。交渉は失敗に終わりますが、使者として送られていた五郎治は、そのまま日本に帰還することとなります。

指揮にあっていたジアーナ号副長リコルドが、交渉決裂と捕虜を失ったことへの報復として新たに連行した日本人が、ゴローニン事件を解決に導いたとされる「高田屋嘉兵衛」です。

またこの時、五郎治が拉致から帰国までの出来事を供述した内容が『五郎治申上荒増（ごろうじ もうしあげ あらまし）』として残され、北海道立文書館などに所蔵されています。

江戸時代、中川五郎治や高田屋嘉兵衛のように、拉致されて外国に渡ったのは稀な例ですが、船の遭難から漂流・漂着、外国船による救助によって外国に渡った事件は、17世紀初頭から19世紀半ばまでの間に、200件以上あったとされています。

ロシアに漂着した「大黒屋光太夫」や、アメリカの捕鯨船に救助された「中濱（ジョン）萬次郎」の話は、小説や映画化され話題になりましたので皆さんもお聞きになったことがあるのではないのでしょうか。

漂流・漂着の数は、17世紀より18世紀、18世紀より19世紀と増加していったとされています。

この時期は、日本列島周囲をつなぐ廻船・海運活動による物流が活性化した時代です。そのことが海難事故を増加させ、また、日本近海に数多く現れるようになった西欧諸国の船舶が、日本人の漂流者を救助することが多くなった「漂流」の時代とも言えます。

江戸時代の漂流事件について残っている記録を翻刻し、まとめた資料があります。



『続帝国文庫 校訂漂流奇談全集』（石井研堂編 博文館 1908）（写真右）と、この中に収めきれなかったものを収録した『異國漂流奇譚集』（石井研堂編 福永書店 1927）（写真左）です。

これらの中に、**青森県の漂流事件**もあります。

奇談全集には、寛政7(1795)年、三か月の漂流の末フィリピンに漂着した青森大町の「徳永丸」船頭久保屋儀兵衛が、長崎奉行所で詮議を受けた際の記録「青森港儀兵衛漂流始末口書」が載っていて、マニラからマカオ、広東、そして長崎へと数々の苦勞の末、漸く帰ってきた様子を読むことができます。この儀兵衛の口書は「唐土漂流記」と改題され、『叢書江戸文庫1 漂流奇談集成』（高田衛他責任編集 国書刊行会 1990）にも収められています。

奇譚集には、宝暦6(1756)年、朝鮮半島の江陵に漂着した津軽石崎村（現在の東津軽郡外ヶ浜町平館）の船頭

治右衛門ら4人が、舞踏・軽業や料理でもてなしを受けた様子が描かれている「津軽船御馳走談」（資料によっては「津軽船朝鮮江陵漂着記」となっています。）と、文政10(1827)年、フィリピンに漂着した八戸の船頭徳次郎ら11人が、青森の儀兵衛同様にマニラ、中国を經由して長崎に帰ってきた記録「融勢丸唐流帰国記」が掲載されています。

「津軽船御馳走談」では、六尺もある獣を食べるようにと出され、そのような獣を食べたことがなく辞退したが、唐人が食べて見せたので、このまま異国人に切られて死ぬより、この毒（肉）を食い死んだ方が幸いだと食べてみた。これが甚だ美味で、この獣は「豕（ぶた）」というもので、朝鮮では重き御馳走であるという件（くだり）では、見知らぬ土地の文化に触れた異国人の戸惑いに思わず笑ってしまいます。

また「融勢丸唐流帰国記」では、唐の軍人との筆談で、日本の皇帝はどこにお住まいで、何というお名前かと問われ「在京であるが、名前は知らない。」と答え、日本国に住むのに今帝の名前を知らないのでは、何を持って日本人と言うのかとやり込められる場面があります。続けて、我々の住む地方は京都から八百里あり、何も知らないと答えています。

当時、政を行っていた幕府将軍の名前は知っていても、遠く離れた京都に居る帝の名前は知らないというのは、現代の情報社会と異なり、十分考えられることです。

『続帝国文庫 校訂漂流奇談全集』『異國漂流奇譚集』に収められている50数件の記録の多くは口書という詮議記録です。小説のような脚色はありませんが、事件や事故によって否応無く、時には生死を賭けた漂流者の記録は、「小説よりも奇なり」です。

読書の秋 「本と旅する 本を旅する」 皆さんは、どのような旅をされるのでしょうか。江戸の漂流者たちとの奇譚の旅もしてみませんか。

- レファレンス申込み及び問い合わせ先
 青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311
 FAX 017-762-1757
 電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介 (第17回)

9月12日(現地時間)、1977年にアメリカ航空宇宙局(NASA)によって打ち上げられた無人宇宙探査機ボイジャー1号が、2012年8月に人工物体として初めて太陽圏の外に出たと発表されました。

また、9月14日には、宇宙航空研究開発機構(JAXA)によって、イプシロンロケット試験機が、鹿児島県肝付町の内之浦宇宙空間観測所から打ち上げられました。搭載されていた惑星分光観測衛星「ひさき」は、イプシロンから無事に分離され、順調に飛行を続けています。(2013.9.24現在)



そこで今回は、親子で読みたい「宇宙」の本を紹介します。ぜひ、この機会に親子で空を見上げ、宇宙を感じてみませんか。

『宇宙 —そのひろがりをしろう—』

加古里子/ぶん・え 福音館書店 1978 (大440J 加*サ A02B)

身近なものの大きさを知ることで、宇宙の大きさを感じることのできる科学絵本です。地球上の小さな虫「ノミ」の話からはじまり、ページをめくるたびに広がる世界は、宇宙の果てまでつながっているのです。

『小惑星探査機「はやぶさ」大図鑑』

川口淳一郎/監修 池下章裕/CGイラストレーション 松浦晋也/解説
偕成社 2012 (538J ショウ A03A)

2010年6月、小惑星探査機「はやぶさ」が、打ち上げから7年と35日の旅を終え、宇宙から帰ってきました。地球から約3億km(地球から月までの距離の約780倍)もはなれた小惑星イトカワのかけらを、無事地球へ届けたのです。

「はやぶさ」が、宇宙でどのような旅をしてきたのか、のぞいてみましょう。

『宇宙への秘密の鍵』

スティーヴン・ホーキング/作 ルーシー・ホーキング/作 さくまゆみこ/訳
佐藤勝彦/監修 岩崎書店 2008 (933J ホーキン*ル A09B)

この作品は、イギリスの理論物理学者スティーヴン・ホーキングと娘・ルーシーの「若い人たちに宇宙の神秘を伝えたい」という願いから生まれた冒険物語です。

「文明の利器」が嫌いな両親の元で暮らし、科学が地球や地球上の生き物を滅ぼすと思っていた小学生のジョージ。しかし、天才科学者エリックと出会い、世界一パワフルなコンピュータ「コスモス」のつくる扉から、宇宙へと飛び出すことに…。

ホーキング博士のスペースアドベンチャーシリーズは、全3部作。2巻の『宇宙に秘められた謎』、3巻の『宇宙の誕生 ビッグバンへの旅』もぜひご覧ください。

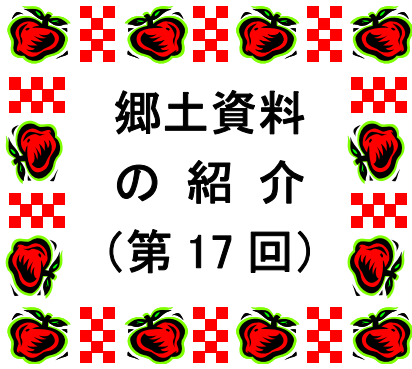


公益社団法人 読書推進運動協議会
<http://www.dokusyo.or.jp/index.htm>

青森県立図書館では、「本と旅する 本を旅する」(2013・第67回読書週間標語)をテーマに、図書館の展示を行います。

展示期間 一般閲覧室 10月25日～12月25日
児童閲覧室 10月25日～11月27日

児童閲覧室では、宇宙の旅も紹介します!



郷土資料 の紹介 (第17回)

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様にご利用いただいております。

先頃、青森県出身の二人の天文家・**一戸直蔵**と**前原寅吉**に関する資料が当館に相次いで寄贈されました。

今回は、同時代に対照的な人生を送った**直蔵**と**寅吉**についてご紹介します。

いちのへ なおぞう 一戸 直蔵 (1878~1920)

一戸直蔵は、明治 11(1878)年、青森県西津軽郡越水村(現・つがる市)の農家に生まれました。

百姓の子に学問は不要だと言う父親に反発して15歳で故郷を出奔した直蔵は、苦学の末に東京帝国大学理科大学星学科を卒業し、明治 36(1903)年に東京天文台助手となります。

しかし、学問上の平等を認めない天文台の封建的な体制に失望し、明治 38(1905)年、当時天文学研究の最先端だったアメリカのシカゴ大学付属ヤーキス天文台に私費で留学。日本人として初めて変光星の観測を行いました。

明治 40(1907)年に帰国後は、東京天文台観測主任と東京帝国大学講師を務めるかたわら、学術論文を次々に発表。また、日本天文学会を設立し、『天文月報』編集主任としてアマチュア天文家の指導育成に当たる一方、天文学の専門家としては日本で初めて天文学の啓蒙書を執筆するなど、精力的に活動します。

ところが、東京天文台の移転場所をめぐる台長と対立した直蔵は、明治 44(1911)年、突然東京天文台の職を解かれ、帝国大学を追われます。

野に下った直蔵は、大正 2(1913)年に若手科学者のための情報誌『現代之科学』を、さらに大正 4(1915)年には吉野作造(1878~1933)らとともに国民教育のための講義録『国民講壇』を発刊しますが、苦しい経営を強いられ、過労から病に倒れます。

後の大正デモクラシーに先駆けて「貴族的平民主義」(精神的向上心を伴った平等主義)を唱え、官製アカデミズムと戦い続けた一戸直蔵は、大正 9(1920)年、その才能を惜しまれながら、結核のため42歳の若さで世を去りました。

しかし、直蔵が手掛けた天文学の啓蒙書はその死後も版を重ね、後に続く世代を育てたのでした。



一戸直蔵

まえはら とらきち
前原 寅吉 (1872～1950)

前原寅吉は、明治5(1872)年、青森県三戸郡八戸町(現・八戸市)に生まれました。

高等小学校卒業とともに時計屋で奉公し、明治23(1890)年に独立して前原時計店を創業した寅吉は、店を切り盛りするかたわら、幼い頃から興味があった天文学を独学し、明治41(1908)年に一戸直蔵の紹介で日本天文学会に入会。

明治43(1910)年にはハレー彗星の太陽面通過の観測に成功したと名乗りを上げ、『満州日日新聞』6月4日付紙面に「列国の天文台が観測に失敗し居れるに、独り個人たる氏が此大成果を収め得た」と紹介されます(ただし、一戸直蔵「ハリー彗星」『天文月報』第3巻第5号(日本天文学会/1910.8)等によれば、実際には、観測成功の報告は国内外各地から寄せられていたようです)。



前原寅吉

直接彼を知る人達からは、純真で無邪気な人だったと評される寅吉。

その常識や通説にとらわれない自由な発想と奔放な想像力は、時に「地球は楕円形ではない」「毎日かがり火をすれば人為的に天候を動かせる」などの奇説を導き出しますが、その一方で、消防用水鉄砲型ポンプや馬用体温計など、郷里のための発明品をも生み出しました。

また、寅吉は日本中に天文趣味を広めようと、自作の天文教材を全国の学校に配布したり、近所の子供たちに自宅の望遠鏡を覗かせたりするなど、ユニークな活動を行いました。「日本宇宙旅行協会」の常任理事を務め、UFOを“空飛ぶ円盤”と名付けたことでも知られる作家・脚本家の北村小松(1901-1964)も、幼い頃に寅吉の望遠鏡を覗き、宇宙への憧れを抱いた一人です。

50代前半で失明した後も星に対する情熱を燃やし続け、八戸の人々から愛された天文山・前原寅吉は、昭和25(1950)年、78歳の生涯を閉じました。



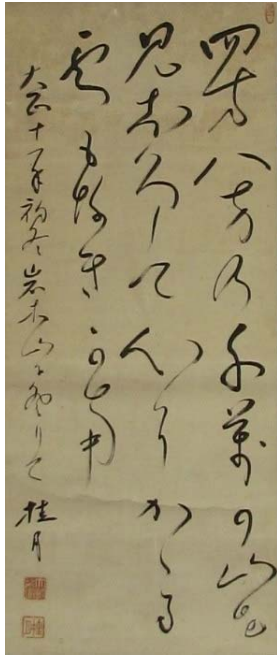
現在、当館では、一戸直蔵・前原寅吉に関する資料とパネルを展示しているほか、天文・宇宙に関する図書、さらに日本SF作家クラブ50周年を記念して日本のSF作品などを集め、**テーマ展示「宙(そら)を見上げて」を10月23日(水)まで**行っています。

秋の夜長、本を片手に遙かな星空に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

近代文学館資料の紹介 (第17回)

「大町桂月が描いた青森」 展示資料

青森県近代文学館では企画展「大町桂月が描いた青森」を10月12日から11月24日まで開催します。青森県の自然を愛し、晩年の多くをおおまちけいげつ 蔦温泉で過ごした大町桂月(1869～1925、高知県出身)の足跡をたどり、作品に描かれた青森の姿を今と重ね合わせて紹介するものです。公開中の資料のうち2点を紹介します。



大町桂月歌軸

「四方八方の千万の山を見おろして心にかゝる雲もなきかな」

四方八方は「よもやも」、千万は「ちよろず」と読む古語です。左側には「大正十一年初冬岩木山に登りて」と記されています。『桂月全集』別巻収録の日記、大正11(1922)年10月14日の部分に登場する歌です。

岩木山神社から登山して山頂に至った桂月は、下山する際には嶽温泉に立ち寄りました。この旅をもとに「岩木山より暗門滝へ」という紀行文を書いています。

今日、岩木山頂では同歌が刻まれた碑(平成11年10月14日建立)を見ることができます。ちなみに青森県内には大町桂月に関する碑が43基存在するほか、胸像やレリーフもあります。本県で最も多くの記念碑を有する文人です。

高村光太郎作メダル「大町桂月翁」

明治41(1908)年、「太陽」編集長・鳥谷部春汀(五戸出身)の案内で十和田湖を訪れた桂月は、同誌に「奥羽一周記」を発表しました。この紀行文によって、十和田湖の存在が世の人々に広く知られるようになりました。

晩年、桂月は全国山水行脚を思い立ち、その第一歩に青森県を選び、蔦温泉に繰り返し滞在しました。

大正14(1925)年5月には、「十和田国立公園期成会趣旨書」を草しましたが、翌月、病のため同地で息を引き取りました。

昭和28(1953)年10月、十和田湖畔休屋に十和田国立公園功労者顕彰記念碑のための裸婦像(乙女の像)が建立されました。その除幕式で記念品として配布された、桂月の顔を彫刻したメダルを青森県近代文学館では所蔵しています。乙女の像と同じく、高村光太郎の制作によるものです。



カウンターからひとこと (第17回)



今回は、「返却用ブックポスト」についてご案内します。

当館から借り受けた資料は、一部の資料を除いてブックポストに返却できます。ブックポストは、「図書館正面玄関右手脇」(総合社会教育センター側)と「県庁舎北棟西側歩道脇」(青森市新町)の2か所に設置しています。

県庁舎北棟西側歩道脇のブックポストのご案内



ブックポストの受入口の大きさ

図書館正面玄関脇ポスト・・・約8.5cm×44cm
県庁舎北棟歩道脇ポスト・・・約5.5cm×26cm

ブックポストへ返却できない資料

以下の資料については、資料(または付録)の破損の可能性があるため、直接カウンターにご返却いただいております。

休館日などであっても、以下の資料のブックポストへの返却はお断りしております。開館日と開館時間を確認の上、ご来館ください。

- ・CDなどの視聴覚資料
- ・CD-ROMなど破損しやすい付録が付いている図書
- ・紙芝居や読み聞かせ用の大型絵本
- ・ブックポストに入らない大型の図書
- ・その他、貸出時に直接カウンターに返却するよう指示のあった資料

また、正面玄関脇のブックポストは、返却処理までに数時間、県庁舎北棟脇のブックポストは、返却処理まで2日程度を要することがあります。当館での返却処理前に返却期限を過ぎた場合や新たな貸出を行う際に返却確認をさせていただくことがあります。どうぞご了承ください。